

授業に向けた学習環境の整備を行った。5月中旬から教員のみWebでの授業を再開し、6月以降は状況を見ながら各講師による対面とWebを併用した授業を行っている。

現在は、「専門学校等における新型コロナウイルス感染症への対応ガイドライン」に基づき、「新しい生活様式」を踏まえた感染拡大防止対策を実践しながら、講師や各施設の理解と協力を得て、講義・演習、臨地実習を行うことができています。

今回の取り組みについて報告する。

14. 身寄りなく社会的問題を抱えた患者支援の一事例

医療社会事業部 地域医療連携課

内海 敬子 清水 雄貴
中井須美代 熊田 真衣
細岡明喜子 糴川 友紀
家村 香織 河南 孝子
谷内 美春 前田 智成
太田 加代

過去一年間（令和元年11月～令和2年10月）、地域医療連携課が介入した身寄りのない患者数は49人（複数回の入院含む）にのぼる。成年後見人の市区町村長による申立は約10年で2倍以上となっており、身寄りのない人が年々増加している。国の動向と地域医療連携課の支援内容は連動している。今回、身寄りのない社会的問題を抱えた患者の関わりを通し、意思支援者のいない人の人生を、支援していくことの難しさと重要性を実感した事例の報告を行う。

【事例】50代男性。脳出血を発症し、当院に救急搬送された。入院時失語あり、意思疎通は困難な状態であったため入院当初より支援を開始した。症状は改善し、ある程度の意思疎通は可能になるが、再出血をきたし手術を行うも再び意思疎通が困難となった。身寄りがなく、健康保険証、会社、同僚・上司というきっかけから、患者の生活背景を知り、退職時期とも重なっていたため健康保険の手続きや金銭管理、成年後

見人申立の支援を行い、療養型病院へ転院となる。

15. 鞍上部・松果体部に発生した中枢神経原発ALK (anaplastic lymphoma kinase) 陽性未分化大細胞リンパ腫の一例

脳神経外科

大前 凌 新光阿以子
高橋 和也 高野 昌平

血液内科

浅野 豪

【はじめに】

中枢神経原発悪性リンパ腫のほとんどはB細胞由来であり、ALK (anaplastic lymphoma kinase) 陽性未分化大細胞リンパ腫のようなB細胞以外のリンパ腫は非常に稀である。今回、鞍上部・松果体部に発生した中枢神経原発ALK陽性未分化大細胞リンパ腫の一例を経験したため報告する。

【症例】

26歳女性、既往歴に特記事項なし。約1ヵ月前からの頭痛、悪心で近医を受診し、頭部MRI検査を施行され異常なく経過観察されていた。その後も症状増悪傾向にあり当院を受診した。頭部CTで鞍上部・松果体部に腫瘍性病変認めため、精査・加療目的で当科入院となった。入院時、意識レベル清明で明らかな神経学的異常所見は認めなかったが多尿・口渇を認め、血液検査では汎下垂体機能不全を認めた。診断確定のため神経内視鏡下に鞍上部・松果体部の腫瘍生検を施行したところ、病理所見はALK陽性未分化大細胞リンパ腫であった。PETでは全身には病変なく、中枢原発と診断した。現在、当院内科にて化学療法中で腫瘍はほぼ消失している。

16. がん化学療法における薬薬連携の現状 薬剤部

○島田 健 大里 勇二
中村 祥敬 江本 文代